

報



會

會 岳 山 本 日

51

月 一 十 年 十 和 昭

大 町 便 り

石 川 欣 一

十一月のはじめ、大町へ行った。長い間、話ばかりきかせて、一度も連れて行ったことがない家内に、秋の山を見せ、「鳥焼き」を體驗させるのが目的であつた。序に家内の姉と姪も行った。とてもいい天氣で、山々はすっかり見え、鹿島槍の布引の方へのびた尾根には雪庇の赤坊が顔を出してゐた。「鳥焼き」は相川のトンネルの裏山で、伊藤久之丞がいつもながら、ニコ／＼して、女たちの羽織や外套や、また握飯などを持つて来てくれた。

◇

そんなことは私事だが、大町下車して對山館の方へ行く途中、左側に「中部山岳協會」といふのが建築を始めてゐる。これは三田旭夫氏が考へついたことで、近來山での遭難が多いが、これを防止するめたに、登山者に傳書鳩を貸し、遭難の場合には是を放つ——といふのである。詳しい話はいづれ報告があるだらうが、現在建築中のは鳩舎とオフイスを兼ねたもので、今月には出來上り、先づ三百羽の鳩で訓練を開始し、來年の登山期には間に合はせやうとの計畫。大町は鳩の中心として最も適當であらう。

持つて入る程に用心のいゝ人ならばあまり所謂遭難をやりさうにもないとも思はれる。だが、この鳩は遭難のS・O・Sにのみ役立て様といふのではなく、立山から、あるひは針ノ木から、遠くは槍穂高の頂上から、一筆をしたゝめ家人なり愛人なりへ送るといふ平和的な仕事も勿論するのだ。僕はこゝに改めて傳書鳩の重要性や軍事知識の育成といふことやを説かうとは思はないが、傳書鳩のはこび方や放ち方ほ至つて簡單でありまた面白いものなので、そんな風な興味的な立場からしても、今度山に入る時は借りてつて見ようと思ふ。

◇

山小屋にも数羽づつ置いておく必要があらう。遭難信號用としては、この方が意味が深いかも知れない。

それから信濃教育會の北安曇郡會が昭和八年の春から仕事にかゝつてゐた地圖が出來上つてゐた。本名は長野縣北安曇郡地方地圖で、別名が日本北アルプス地方地圖。十二萬五千分一で陸地測量部の承認を得てゐる。これは登山地圖であると同時に學校の生徒に郷土地理を教へる教材でもあるから、發電所、送電線等に電力を記載したり、中々面白い。詳しいことは専門家の批評を乞ふとして、僕としてはこの地圖を主として、僕としてはこの地圖を主として

つくり上げた小學校の若い先生たちに敬意を表し、いゝ地圖が出來たことを御紹介するにとめておく。

會歌制定の提唱

山口 秀 次 郎

過般大阪で盛大に舉行されました本會三十周年記念大會に出席して感じたことですが、この機會をもつてより好く會員の親睦を増進せしめるために、會歌の制定を提唱したいと思ひますが如何でせうか。

當日はあれだけ意義ある集會として、而も會長を始め幹部知名の士が多數列席して居られるにかゝはらず我々平の會員にとつては唯何となく、あはたゞしさに終始して、今一步の所びつたりとした親和の雰圍氣を味ひ得ずに散會いたしました。若しあの時に會歌の合唱でもあつたなれば、記念大會に相應しく全體が一つになつて喜び合ふことが出來たものではなかつたでせうか。

殊にあの日の晩餐會は、何所かの名士歡迎會のやうに、離ればなれのテーブルに長まつたまま主立つた人達の挨拶交換を傍聽するのみで、三十周年を祝ふ意味の乾盃もなく、時問が迫つたといふ幹事さんの聲に追立てられて、倉皇として講演會場へ馳付けたやうな有様でしたが、かゝる場合にあつても、僅か數分の餘裕を見計つて會歌を唱和することができれば、出席者一同が、心を合せて觀意を交歡し得たものではなからうかと思はれます。

引續いて講演會場に於きまして、閉會の直前に出席會員が一團となつて會歌を唱和するやうな機會を有つものと思はれ、あの雅然たる活動小屋の終演時のやうな空漠たる氣持を味ふこともなく、會場掉尾の氣分を引締めて、眞に三十周年記念大會としての意義を一層緊密に肝銘し得た筈だが……と思はざるを得ないのです。

このやうなことは、獨り我が山岳會のみの問題ではなく、近來多くの山岳誌に記載されて居る山と音樂、或は山の歌などの文獻に指示されてあるやうに、一般岳人の自然生活に豊かにするために一要素として、切に會員諸賢の御考慮を煩はしいと思ひます。

なほ私がこゝに會歌制定を提唱する素因の一つとして、國民歌謡の貧困といふ問題を添加して頂きたいのです。

何事によらず、世界の一流に伍して憚らない我國ではありますが、唯一つ、いろいろな場合に會衆一同が明朗に唱和し得るやうな、國民歌謡を有たないことが何よりの痛恨事だと日頃から思つて居ります。これには一通りならぬ來歴のあることと思ひますが、結局は過去に於ける文教當局の石頭と、識者の怠慢と、一般

家庭に於ける生活態度の欠陥から、求めても、望むでも、與へられないがために止むを得ず、レコード業者の提供する『賣らんがための歌謡』をもつて満足せねばならぬといふ現狀だと思つて居ます。

で此際、國民歌謡の改發といふのもちと大げさですが、少くともそれ位の意氣込みでまづわが日本山岳會の會歌（希くば正副二様）を制定して頂きたいのです。そして是を大小の集會その他時機に應じて適用して頂けば、唯に會員間の親交を増補するばかりでなく、惹いてはこれが軌範となつて各地方同志の注意を喚起し、自然を背景とした簡素な歌謡が次々と生れてくるやうになれば、期せずして山を好む若人達の間に明朗な歌聲が流れるやうになつてくるでせう。そしてこの機運が一般社會にまで進展すれば、やがて現時の低俗な流行唄を驅逐して、新鮮なる國民歌謡の勃興を誘致する機縁ともなるに違ひないと、秘かに念じて居る次第であります。

なほ會歌の様式については、前文に希くば正副二様と申しましたが、その一つは儀式用として相當權威ある莊嚴なもの、他は山小屋などで楽しく唱和し得るやうな軽いもの二つ三つ、いづれも岳人の歌謡に相應しい素朴簡潔を旨とした民謡風のものであつてほしいと思ひます。

（安言多謝）
昭和十・十一・十一記

富田節齋翁と信濃國

穂高池之圖

笠原烏丸

山岳への切なる憧憬は、いつしか私をして、その古文獻の蒐集、並に研究にところを傾けさせるやうになつた。

わけでも私が、我が郷土、飛驒の先人の遺詠にこころを引かれるのは人情の常として、極めて自然のことであらう。

いま新しく遺詠三首を得たるまゝ、茲にこれを掲記し、以て世の山岳愛好の人士と共に、その喜びを分かちたいとおもふ。

詠歌一首

雪夕眺望

しくれる雲は夕陽にかつはれて
笠のみたけにゆきそつもれる

詠詩二首

春日同吉佳禮郷登見景山作

笠岳槍竿復錫轡 眸端指畫幾摩顏
遙天別有模糊雪 知是越中六一山

信濃國、穂高池之圖に題す

秀高連嶽映池浮 厚狹清川達社流
世上不知東海外 山中有此小松洲

右に記せる三首の詩歌は、その何れも、白梅園、故富田節齋翁の遺詠にかゝるものである。

人も知る節齋翁は、吾が郷國飛驒の先賢、名は禮彦。通稱は稻太、白

梅園および節齋は、何れも故翁の雅號である。

我が國學の偉傑、本居宣長翁の逸足たる荏翁、贈正五位中大夫秀翁に師事して國學を修め、博學多識、夙に斯學の隆盛にこころを致され、殊に詩文に長ぜられては、百方後進の指導誘發に意をもちひられたのであつた。

かの高橋泥舟、海舟—勝安芳と共に、維新のころ、三舟とならび稱せられた俊傑、鐵舟—山岡鐵太郎は、その少年時代を、吾が飛驒の山郷の街に過し、禮彦先生に師事、親しく故翁の薫陶を受けられたものである。

畏くも、過る大正十三年二月十一日、先帝陛下 大正天皇には、翁生前多年の功を思召され、紀元の佳辰に際し、從五位追贈の恩典を賜はつたのであつた。

明治十年五月三日、惜しくも病を以て歿せられたのである。

越前福井の生んだ國學の偉材、橘曙覧と親交のあつたことは、等しく讀者の知るところであらう。
享年六十有七歳、諡して「五十白梅彌榮枝彦大人」といふ。

高山町の西郊、上岡本なる嚴楓ヶ岡は、輒ち、故翁の奥津城のあと

ところである。

和歌「雪夕眺望」は、初冬の候、山嶺の白雪淡く夕陽に映え渡り、その端麗、富嶽の如き、笠ヶ岳の容姿を詠へるものが、故翁が遺著の一なる「飛驒國名勝大概」に錄されて居るもの。漢詩の一は、故翁と共に、當時地役人たりし吉住禮郷氏と相たづさへ、一日、勝を西北郊なる見景山に探り、その山嶺、はるかの東天に重疊たるアルプスの雄姿を詠へるもので同じく先生の遺著なる「白梅園詩抄」に收載せられて居るものである。

右の詩抄は、故翁が高足たる桐山祐郷、加納弘微兩氏の編めるもので慶應三年の上梓、巻頭は、當時の碩學にして、故翁と親交ありし、長三洲および支峯—頼三樹三郎兩氏の撰文を以てかざられて居る。

扱て最後の漢詩であるが、これは故翁が、親しく神河内を訪づれてその絶勝を稱へ、かつこれを一葉の見取圖におさめ、これに自ら讃せるもので、少さく折りたたみたる圖の表に

信濃國穂高池之圖

と明記してある。

用紙は生漉きを用ひて稍あつく、半紙版倍大の大きいである。
筆致極めて優に、凡ならざること、は、ひとしく讀者の讚するところであらう。

紙上自讃せるあたりに「上」の一字

の見えるゝは、なにか逸物を贈られたる折の、反古用紙を、そのまゝ利用せられたるものらしく、坐ろに人をしてなつかしさを覚えしめるものがある。

世上今日、頻りに俗化を傳へられる神河内の現況にして、なほ天下の絶勝の地として喧傳せられるもの。ましてや人馬の通行繁からず、眞に仙境とも稱すべかりしならん當時の神秘境を詠ひたるもの。明神の池中青松を生やし、三三、五五、此處、彼處に點在する小嶋を、かの陸前の國、松嶋の絶勝に比せるの詠嘆！實に此の見取圖と共に、世に得難い山岳研究の好資料である。

たゞ一つ茲に遺憾なことは、見取圖作成の年月の附記せられて居ないことである。

今日でこそ神河内といへば、その風光字内に冠たるの地として、近くは所謂中部日本國立公園指定地として、その名は餘りに有名であるけれども、翁の當時にあつては、一般人士の間に於ては、その名は、殆んど知られて居なかつたといつても、強ち過言ではあるまいとおもふ。

扱てかかる當時にあつて翁は、何時また何んの所用あつてか、此の神秘境にと赴かれたのであらうか。私は先づ、此等の事實を知らんがために、翁のものとされた日記なる「幻中記」「公私日次記」等につき、詳細にこれを調査したけれ共、幻中記には、かゝる記載は更になく、一

方公私日次記は、弘化元、二、三、四年、嘉永元年及び安政二、三年、それに明治六年以降は缺本となり居るため、惜しいかなその目的は達せられないのであつた。

無論飛騨側より、神河内を訪ねられたものと前提して、いま往時の常飛騨の國より、信濃の國への交通路を調査するに、當國なる吉城郡上寶村より、信濃の國南安曇郡へ入るのに二條の小徑があつたと考察せらる。

一は往時より信濃峠と稱せられ、神坂村(現稱神坂)より神河内にと到達するもので、現在中尾峠と稱せられて居るものである。

今一つの徑路は、平湯村(現在平湯より大野川に通過するもので、往時銀山峠と稱せられたもの、輒ち、現在の安房峠である。

私はいま、天保年間すでに、神坂村の一小支邑たりし蒲田區に、御番所の設置せられた事實に想到して、此の間の事情を研究してみたいと思ふ。

前にも述べた如く、當時信濃峠と稱せられて居た現在の中尾峠は當時にあつては、單なる一條の樵徑に過ぎなかつたであらうけれ共、漸を逐ふて、人馬の通行が、繁を加へるやうになつて來た。

乃で飛騨側に於ては、中尾村外三十有九ヶ村、信州側に於ては、小倉村外十有五ヶ村、輒ち、信飛の國境に近い兩國の有志者たちは、百方協

議の結果、信濃峠改修の件を決議しこれを當局に請願したのであつた。

時に當飛騨國に郡代たりし大井帶刀永昌は、早速その意を體し、江戸の勘定奉行に何済の上先づその試みとして、神坂村の一小支邑なる前記蒲田邑に、假番所を設け、初代の番所

詰として、當時高山町の地役人たりし山崎弘泰氏を任命したのであつた天保十二年八月のことである。

山崎弘泰氏も亦、田中大秀翁の高足で、年長の故を以て、師翁よりその文机を繼承し、學統をつぎた人である。

弘泰氏等と共に、當時等しく地役人たりし禮彦翁は、天保十三年には早くも年齡三十有二歳にして、抜かれて地役人の頭取となつたのであつた。

前掲の如き事情に徴するに、或は公務を帯びて、此の方面に出張巡視のその砌、新道改修の視察を兼ね、神河内にと赴かれたものであらうと察するのである。

文政十二年に、初めて神河内に温泉宿が一軒設けられ、その後天保二年に到つてもなほ、前記の温泉宿は存在して居たのである。

右の事實に徴すれば、蒲田御番所の設置、輒ち、信濃峠改修の緒についた、天保十二年に入つてもなほ、此の温泉宿は、依然として存在して居たものと、考察せられるのである。

右の如き事情を以てこれを推すに

翁がこの見取圖作製の年月は、天保十三年の夏日、輒ち、今を距ること九十有二年前となるのである。

滾々と玉とくだけで湧出する清泉に浴後、脱俗の仙郷に、萬解の涼味を掬しながら、日頃嗜める酒盃をかたむけつゝ、こゝろ陶然として想を練る翁の温容が、勢拂として、眼のあたり、見られるやうな氣がしてならない。

田中大秀翁と親交ありし、横山言局氏記すところの、古記録「諸國大變聞書不思議成事集書」を繕くに、

「去る年より、初て高原郷蒲田より信州へ新道作り、道決る、蒲田より半里、中尾燒峠登り一里、下り一里半、上川口と申所、一里程の平地、

信州の内、湯出申候に湯屋壹軒、岩岡伴次郎と申す者、此處に大家作り居申候而、往來宿仕ル。夫よりちやうヶ岳(蝶ヶ岳)と申登り二里半、

下り四里餘程、夫より小倉と申所へ出、夫より松本町二里 蒲田より松本迄十三里(原文のまゝ、括弧および傍點は筆者の記入である)

とある。右の文中、岩岡伴次郎とあるは、岩岡村の庄屋にして、その庄屋在勤中、信濃峠の改修を發願し、文政三年より天保八年に亘る、前後二十餘年間己が全財産を投じ、家門を過れ共入らずの一大勇猛心を以て、その竣功に専念盡力した人である。

當時、官はその篤志を賞し、工事申前後を通じ、金百八拾五兩二分程

百二十俵の救恤をなして居る事實がある。

その後、安政四年十月の頃か、中尾口の御番所は、故あつて廢せられてしまつた。

現在の中尾峠は、道路空しく荒廢して往年の經營の見るべき物なく、岩岡氏の功績は空しくなりたるには似たれ共、すでに百十有六年前、神河内に温泉宿を建設し、百方信飛兩國間の來往者に多大なる便益を與へたるもの、氏や今日の神河内の異常な繁榮振りを見れば、以て安らけく泉下に眠るべく、氏の事業たるや實に神河内發展の基をなしたるものにして、その偉大なる功績たるや、眞に永却不滅の生命を有するものといふべきである。

附 記

(一)本見取圖は、筆者の中學時代の恩師、文波—富田豊彦先生の書庫に於て、發見せるもので、作者禮彦翁は、先生の御祖父である。

(二)横山言局氏の古記録中「去る年」とあるは、天保二年をさせるもので、今日より壹百有三年前のことである。

松室了廓居士の

鞍嶺五首

「贈正五位松室了廓居士」と斯う書けば、そも一體なんびとであるか、一寸解り難いこととおもふ。

これぞ誰れあらう、我が飛騨の生める國學の偉傑、かくれたる尊王の士、香木園田中大秀翁その人なのである。

時まさに盛夏の候、山氣の我等を誘ふて切なるものあり、いまおもひ出づるまゝに、故翁が數多き詠草の中より、日本アルプス乗鞍岳に關する遺詠の二、三を記し、以て山岳愛好の人志の清吟に供したいとおもふ。

久方の雲井にみえし鞍嶺の高ねにちかき山わけ行くも
右は即ち、故花名翁の紀行文なる「枕の月」に見えるもので、縣居翁加茂眞淵門下の逸足なる近江の人、海量法師の飛騨來遊にあたり、自ら親しく案内の勞をとられ、岳麓なる平湯温泉にと、行を共にせられた折に詠まれたもので、時は文化二年の盛夏八月、大秀時に年二十有九、まさにその壯年初期の吟詠である。

「枕の月」は、同年八月三日より十三日に至る、都合十二日間の行旅の様を記したもので、平湯、高原を経て船津に遊び、更に安國、千光の兩古刹をも訪ねられて居り、又一つに

「高原紀行」として、讀者の間に知られて居るものである。

短歌を主とし、その数すべて三十有七首、何れも萬葉調の極めてあつさりしたもので、その文は先づ、歌の詞書と見るべきものであらう。

流石に翁壯年期の作だけあつて、そこにいひ知れぬ迫力があり、歌と相俟つてよくその情景がつくされて居る。

いまその一節を見るに「近江國海鏡法師、七月のはじめより、此の高山の里に物せられて、みやひ人をとぶらひ、歌よみ、文つくりつゝあそはれけるに、平湯山の瀬いとゆかしがられければ、八月の三日出立けり。

草枕けなき旅にあらなくに旅といへはまうらがなしも四日、平湯のたむけをのほる。笹のしけみ露いとふかし。

久方の雲井にみえし鞍ヶ嶺の高ねにちかき山わけ行くも

已の時過くる頃平湯村につきぬ。(下略)

乗鞍か岳

おとなふや駒の鈴むしくつむし鞍か峯いつる月人をとこ

右の一首は、國司姉小路中納言基綱卿の遺詠にかかる、かの「飛驒八所」の歌に、更に翁自らの遺定にかゝる、乗鞍、浅水の二景勝を加へ、新に「飛驒十所の歌」として世にはれたもので、鞍嶺月夜的美觀を詠

嘆せられたものである。

我が宿のものとこをみえししるる

鞍の高嶺の秋の夜の月

歌は、故翁が所謂「千種園八勝」の中に見られるもので、翁の荏名隠棲後の作であり、歌意の如く前者と共に、また月夜の乗鞍岳を詠ぜられたものである。

文化十四年七月、即ち翁は、年なほ四十有一歳の壯齡を以て、早くも家督を嗣子壽豊に譲り、身を一神官として、高山郊外の荏名に隠棲し、此處に於て、専心國學の研究に身心を委ね、以て尊王敬神と二大精神鼓吹の素志を貫徹せんと期せられたのであつた。

かの大伴宿禰の遺詠なる

八千種に草木を植て時毎に咲かむ花をし見つしぬばな

の古歌に因んで、その閑庭に草花を植えて千種の園と命名し、自然に親しみ、詩歌を件としては、只管に詞藻をねり、時に雅樂を奏してはその風懷を恣にしつゝ悠々自適、以て斯學の興隆に努力せられたのであつた。爾來生を終るまで約三十年、荏名隠棲のこの新生活こそ、げに大秀翁の新生命とも稱すべく、その偉大なる事業の大半は、此處荏名の閑居に於て成就したのであつた。

即ち「荏名神社再興の事」繼體天皇碑の建立」等のことは、何れも此の間に於て企圖せられ、後世物語註解の權威とせられて居るかの「竹取物語解」の如きも、また此の荏名隠

棲の草屋に於て、大成せられたのであつた。

翁一代の隨筆なる「荏名冊子」もまた此の郊外の新生活に於ける貴重なる所産であることを念としなければならぬのである。

翁はその草屋に名づくるに、千種の園を以てしたことは、既記の通りであるが、また一つにその閑居は、「月見の屋」とも稱せられて居る。蓋し閑居草庵の東、はるかの天空に聳立する鞍嶺の月を愛で、かくは命名せられたものであらう。

くらがねやこと木はたへぬ時しく雪の下にも松は生てふ吹風の聲寒ければ松かけに人こそつとへ夏の夕くれ

右二首の歌は、故翁が隨筆なる「千種の園」卷二に見えるもので、弘化三年に稿成つたものである。

弘化三年といへば、大秀翁年すでに古稀に達した時であり、まさにその歿年に前つこと一ヶ年のことである。

翌弘化四年三月十一日、越前より歸國の後病床に臥して又起たず、同じき九月十六日、瀕死として長逝せられたのである。

法號、松室了廓居士、遺命によつて郊外江名子なる松室岡に葬り、諡して「豐美豆穂八束足穂大人」といふ。

墓標後背の圓丘は、實に故翁が永眠の奥域であり、珍城園遊みどり深くして松嶺常に颯々、眞に故翁が偉

容を偲ばしめるものがある。

大正四年十一月十日

先帝陛下 御即位の大典に際し、翁生前の偉功を思召され

聖旨授くも 贈正五位の賜を賜はられ、盛大なる報告祭の執行せられたことは、世人すでに周知のことである。

前述 海鏡法師の飛驒來遊は、同法師七十三歳の時であるが、なほ壯者を凌ぐの概があつたらしく「枕の月」に次の如く結んであるによつても、それと推知せられるものがある。

「海鏡法師いとすこやかにて、道ゆくことなど若きものもようせすはおくれぬへき勢なり。されど七十三の翁なれば、いたう照り渡る此頃の暮きに、いかがあらむとおほつかなくおもひつるを、それもあたらす歸られしことをかへす」よろこぶ」と。

同法師は、文化十四年十一月二十日旅に出でんとして俄に入寂すと記してある。

享年八十有五、その遺詠の一首を記さんに、

うみへりにたちならはる足引の山の白雪みれとあかぬかも

彦根山のふもとなる浦にてよめると附記してある。

(昭和九、八、二十一日稿)

註一 所在は乗鞍山麓平湯温泉、平湯大瀧を以て名あり。
註二 特別保護建造物なる經藏あり

るを以て知らる。

註三 傳説の兩面宿禰及び美濃の奇人圓空法師の鋭刻佛像を以て名あり、

註四 日本佛家人名辭典による。(笠原 烏丸)

新雪の驛より

拜啓其後は全く御無沙汰勝ちにて失禮仕り候皆々様今夏は賑かし立派な記録の登山されし事と拜察仕り候小生夏には雑用の爲出かけられず今度機を得て紅葉と新雪の旅を試みに十九日夜行にて出發千垣にて野口外一名を伴ひ和田川を廻り途中の紅葉を賞しつゝマタニに一泊翌日有峯に泊り候が前夜より立山ヤクシ上ノ岳等の新雪に冠されし偉容に接し愉快に候翌日太郎平上手小屋に宿、翌日はヤクシ登山を試み候が終日一點の雲影もなき風もなき稀に見る快晴に恵まれ頂上にて一時間近くも費し、新雪に變化されし見え得る諸峯を全部を賞しよい氣持になり、登り三時間下り一時間程にて太郎小屋に泊り、翌日も前日同様の快晴にて上ノ岳に登山致し午後下山有峯に泊り翌日は飛驒に出で大和、左古を徑て土に出で高原峽を見て猪谷にて車中の人となり車中より立山連山を眺め得て富山に出で廿五日夜行にて歸京仕り候 勿々

十月二十九日 岩永信雄



會務報告

役員總會並十一月定例理事會

十一月十四日午後七時於本會事務所

出席 高頭、小島、木暮、横、島山、松方、額田、三田、逸見、飯塚、田口、木村、黒田、(以下委任)
武田、高野、近藤、冠、田部、三枝、榎谷、加賀、今村、高橋、福島、三木、磯野、森田、櫻井、

役員 總會

一、關西評議員推薦に關する報告

一、理事改選の件

理事 會

一、關西支部報告

一、尾瀬、富士、保勝運動に關する經過報告

一、山岳三十年二號編輯報告

一、山岳遭難救助機關案募集經過報告

一、年次大會開催に關する件

一、來年度豫算の件

一、會員肖像募集の件

一、東大山岳部南千島遠征に寄附金贈呈の件

一、十二月定例理事會に關する件

第七十回小集會

昭和十年十一月十四日 於三會堂
一、山の寫眞につきて

會員 額田 敏氏

今回は方面を變へて額田氏から寫眞の講演を開くことにした、登山形式と寫眞器械の種々、寫眞器械の主要部分、感光材料とフィルムター、露光、望遠寫眞、ステレオ寫眞、山の撮影、の各項目に就て、詳細な説明があり、數多き計數的の圖表に基きつゝ一時間餘り講演された、終て少憩の後、幻燈によつて補論せられた。講演は寫眞については一般的素人向きに話され、我々にとつては大いに得る所があつた、たゞ其道の専門家にとつては或は物足らなかつたかと思ふが、制限せられた時間の都合上また會の性質上、已むを得ない事であつた。ともかくこの短時間の間によく之だけの横い内容のものを要領よくまとめられたものと講演者の勞を感謝しなければならぬ。

來會者は、百餘名の盛會で、その多くは學生達であつた。

出席 席 者

高頭仁兵衛 多賀 富藏 茨木猪之吉
黒田 孝雄 逸見 眞雄 木暮理太郎
丹羽 惠 岡本 勝二 大村 清
酒井 忠一 木村 康夫 齊藤威三男
森田 勝彦 林 俊介 三浦 新
横 有恒 藤枝 義男 高橋良之助
田口 一郎 關根 吉郎 田邊 主計
新庄 球生 小島 久太 神谷 恭

戸塚 武彦 太田 新吉 小南 清
宇田川久太郎 福田嘉四郎 西川信義
宮崎 健一 増山清太郎 泰山仙二郎
吉田 禮二 飛川 維之 鍋倉 英夫
甲村 琴珊 小松 喜一 大村那次郎
塚本 繁松 湯淺 巖 岩崎京二郎
猶原良一郎 山田幸太郎 橋本晋七郎
安田 正介 吉澤 一郎 中司 文夫
磯貝藤太郎 ジルベル、ジャン 淺原 重繼
大島 永明 野口 未延 加藤 保二
伊藤朝太郎 櫻内 繁雄 高野 鷹藏
國鹽研二郎 會員外四八名

新着圖書

山岳講座 第一卷 共 立 社
體育研究所概要十年度 體育研究所
地學雜誌 十一月號 東京地學協會
山小屋 同 朋 文 堂
野 鳥 同 集 林 書 房
登山とはいきんぐ 同 大村書店
登山とスキー 同 黎 明 社
東京登山歩流會報 同
明峯山岳會報 同
東京山岳山岳會報 同
屋ゼの會報 同
東京山岳俱樂部報 同
東京アマチュア山岳會報 同
獎健リンドーフオゲル部報 同
關東岳愛會報 同
東京旅行俱樂部報 同
關東旅行俱樂部報 同
峠の會報 同
日本登高會報 同
がくれい會報 同
かやりび山岳會報 同
魚市場山岳會報 同
東京高嶺會報 同
紫雲會報 同
武藏山岳會報 同

會報第五十號正誤

頁段	誤	正
41	なくして	ないで
30	なに	なもので
31	因り	因つて
22	性質	特質
49	陥り容易に、	陥り、容易に
12	潔癖	潔癖家
31	日夜の次に以下四行挿入	
52	國事に心を砕き、殊に昨今は、從來捨て、全く顧みなかつた程の、比較的些細な事柄にまで多大な注意を向けるやうにさへ見えるが。それ程迄	

昭和十年十一月廿五日印刷
昭和十年十一月三十日發行

編輯者 額田 敏
發行所 日本山岳會
電話 六四九番
廣告 一手取扱 電話 四六五四番

印刷所 印刷木多

ミマツ特製 "アールベルグ・スキー"

ヒツコリー・ミツナラ・アツシユ・イタヤ

スキー用具が豊富に取揃
ひました。御用命は是非
ミマツへ



合名 **美 満 津** 会社

東京・本郷・赤門前
電話 小石川 (85) 845・2071